

「葬送列車」

1130081 城田 和典

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

Key Words: 葬送、山、駅と線路、列車、スイッチバック

1. 背景

社会の発展により、人々の生活様式や慣習は大きく変化している。これは「葬送」においても当てはまり、形式的な行為のみが合理化され、人の心に通じる大切な部分が忘れられている。都市化の進行にともない、非日常的な場であるはずの火葬場には、式場が併設され、葬送に関する一連の行事を執り行う機能的な都市施設へと変わりつつある。また、コミュニティの崩壊は人と人との関わりを希薄にし、葬儀に出席する会葬者の数は年々減少している。

一方で、近年、映画「おくりびと」がヒットし、生前葬への関心が高まるなど、人々の「死」に対する向き合い方が、改めて問い直されている時代でもある。葬儀は、コミュニティや家族、個人の存在をより一層強く認識させられるものであり、また、人の生や死を扱う最も荘厳な儀式は、日常の世界とは切り離された場所で行われるものではないのだろうか。本設計では、葬送行為に列車を掛け合わせることで、故人を偲ぶ「葬送」のまた違ったあり方を提案したい。

2. 敷地

2-1 対象敷地

対象敷地として選んだ場所は新改駅である。新改駅は、高知と阿波池田の間にある JR 四国土讃線の駅であり、現役のスイッチバックがある無人駅である。



新改駅プラットフォーム 新改駅 林道から

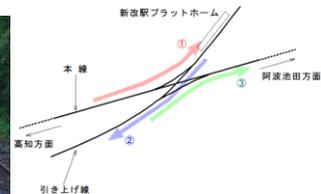
四国山地の険しい山中にあるこの駅は、特急列車はもちろん、鈍行列車でさえ一部は通り越して

しまう。駅から最も近い集落へは、徒歩にして約 20 分細い山道を下りきらなければならない。

一方で、高知市内から JR を利用してわずか 30 分で到達できるという特色も持ち合わせている。高知から新改へ、列車は一気に山を上っていき、車窓からの景色はあっという間に変わっていく。列車が乗客を街から自然の中へといざなうことになる。

2-2 スイッチバックについて

新改駅の大きな特徴として挙がることは、「スイッチバック」が見られることである。スイッチバックとは、地形が急勾配なところを、折り返しながら進むように敷かれた線路のことである。列車はまず、本線からはずれたところにある新改駅のプラットフォームに入り、いったん引き上げ線へと後退した後、再び本線へ向けて走り出していく。



スイッチバック写真 スイッチバック図解

スイッチバックが現存する駅は全国でも数えるほどで、四国では新改を含めて 2 駅だけである。また、鉄道技術の進歩により、スイッチバックは廃止に追いやられている。今も現役であるスイッチバックの光景は、かつて山道を蒸気機関車があえぎながら走っていた、古き時代の名残をとどめているようである。

3. 敷地からの着想

時に、列車が敷かれた線路の上を走る姿が、人が生きていく姿に重なることがある。線路は人生の行路であり、主人公は列車である。

線路を人生の行路に例えた時、スイッチバック

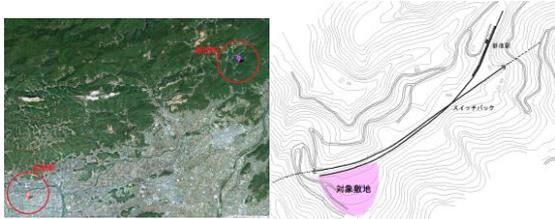
という線路形態が持つ特殊性に注目できる。一つは、線路が分岐、交差していることであり、ここでは人生の岐路のようなものを想起させられる。もう一つは、本線からはずれたところにある、プラットフォームと引き上げ線に続く線路が途絶えていることである。ここでは、人生の終わりを想起できる。

4. 設計主旨

4-1 葬送列車の計画

計画として、スイッチバックの引き上げ線の先に葬斎場を設計し、高知発新改着の葬送列車を走らせる。

市内の式場で葬式を終えた会葬者は、高知駅に揃って集合した後、棺とともに葬送列車に乗り込み、30分余りで新改の山へと上っていく。車窓からの移り変わる風景の中、大切な人を回想する時間が与えられる。そして、俗界から離れた自然の中で、最後の別れが行われることになる。



高知駅、新改駅の航空写真

葬斎場の位置

4-2 葬斎場の計画

葬斎場の対象敷地は、山肌を無造作に削り取られた開拓跡地であり、なだらかな斜面が現れ、空虚な表情を示している。



敷地写真1

敷地写真2

葬斎場は一般的に、待合室や事務室等からなる待合棟と、炉室や炉前ホール、機械室等からなる火葬棟の二つによって構成される。本葬斎場の設計主旨としては、待合棟が「駅」の形態をしていること、火葬棟が「自然葬」を彷彿させる形状をしていることである。

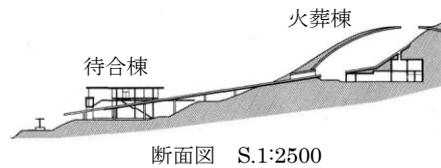
待合棟として、引き上げ線の線路につながるプ

ラットホームと駅を設計し、そこから見立てとしての線路を、斜面に沿って上向きに走らせる。ここで故人は新たな路線への乗り換えを行うため、会葬者は駅の待合室で告別の時を待ち、プラットフォームで告別が行われる。

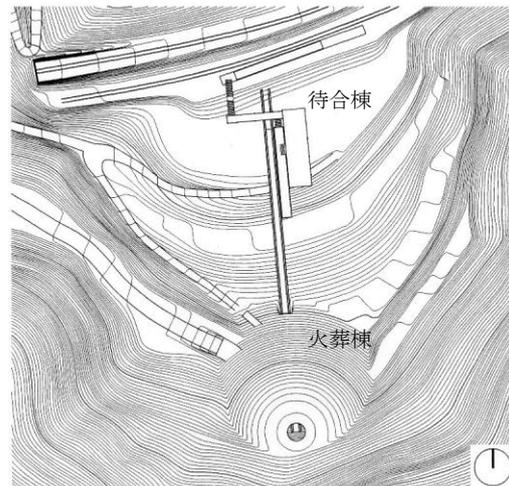
火葬棟については、待合棟から少し離れたところに、炉前ホールとして、天窓の付いた直径約70mのドームを斜面にかぶさるように配置させる。

ドーム内には待合棟から伸びてきた線路が通っていて、炉前部分と天窓の下部で線路は途切れている。炉前からは、天窓を通して、天空からのかすかな光が線路の先端に差し伸べている光景が目に入り、葬送の終局として、会葬者は故人の旅立ちを見送ることになる。また、広いドーム内のほとんどの範囲が会葬者にとって不可侵であり、尊く厳かである「死」の尊さや厳かさを表している。

さらに、ドーム内では地肌がさらけ出されており、また、ドーム上には土が覆いかぶさることによって、小さな山のような外観が形成される。これは、故人の体が大地に還る様子を表している。



断面図 S.1:2500



配置図 S.1:2500

